

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 佐藤 麻貴

論文題目：

On the Relationship between Humans and Nature: Toward the Conservation of Diverse Values

(人間と自然の関係性 多様な価値の保全に向けて)

本論文は、環境思想の視点から人間と自然のあるべき関係について多面的に考察する、英語で書かれた論文である。本論文は研究対象を明示する第 1 章のあと二部構成をとる。第 I 部では、これまでの環境倫理学の発展にもかかわらず、現実の環境をめぐる政治に十分作用することがないのはなぜかを問い、2 章から 4 章にわたる各章でそれぞれの領域について論じられる。

まず第 2 章では、環境問題が主題化してきた経緯と段階が語られたあと、環境をめぐる政策の諸タイプと倫理的なバックグラウンド(功利主義、カント主義、徳理論)との対応が示される。そして環境問題の多様性を前提としつつ、どのようにこれらを包摂できるかという問いが立てられる。

第 3 章は本論文の中心的な章のひとつである。前半では自然概念が決して単一ではなく、歴史的に変容してきたことが述べられ、ヨーロッパ思想史を主たる材料として、古代ギリシア・ローマから近代のルネサンスや科学革命を経て今日に至る自然観の変遷が概略的にたどられる。そのさい本論文は、哲学者 Robin Collingwood の研究に依拠し、古代、ルネサンス期、Darwin 以降の現代の三つに自然観を区分している。ルネサンス期とそれ以後の自然観には、Giordano Bruno の「能産的自然」のようなケースもあるが、本論文は、この時期の自然観が概して機械論的でマテリアリスティックな性格を有し、人間と自然とを外在的に対置することで人間による自然の利用を可能にする方向に作用したとする。一方こうした機械論的自然観は、19 世紀の生物学、とくに Darwin の進化論の導入によって大きな変化を遂げたときれる。生物学中心の自然観を通して、J. Uexkull のように生物種ごとの「環境」の観念が生まれ、エコロジー思想へとつながっていく。

本章の後半では、ロマン主義による自然の美学化とポストモダンの自然観に説き及ぶ。後者について本論文は近年影響力のある Bruno Latour、Kate Soper、Timothy Morton のそれぞれ個性的な論考について検討し、自然の自明性が疑われるようになった現代における自

然観の困難さについて言及している。以上の自然観の変容を受けて、人間が自然を認識するさいのプリズム的モデルが示され、「宗教」「科学」「文化」のプリズムを通して人間にとっての自然が「創造される」ことが説かれる。そして本章の結論として、人間と自然との関係についての四つのモデルが提示される。それは、①自然が人間を包摂する「カプセルモデル(capsule model)」、②自然と人間が一部で重なり交渉する「相互的モデル(reciprocal model)」、③自然と人間とが外的に対立する「外部的モデル(external model)」、④人間が自然を包摂する「内部的モデル(internal model)」である。

第4章では、先の章で示された「宗教」「科学」「文化」のそれぞれのプリズムが、環境思想とどのような関係にあるかが Thomas Berry, Evelyn Tucker, John Grim の研究を踏まえて詳論される。まず宗教については、スピリチュアルな経験を含めた広い意味での宗教性が自然との共生を養う感受性を与える一方で不寛容な対立を生む両義性を有することが論じられる。科学については Joseph Needham の中国科学史の研究を参照しつつ、科学の西欧中心主義を脱する可能性が説かれ、また自然科学の視点からエコロジー思想を展開した Edward O. Wilson らの研究が紹介される。文化については、Aldo Leopold の「土地倫理(land ethics)」の思想をもとに普遍的な地球倫理が可能とする Baird J. Callicott の考えが紹介されたうえで、Berry や Tucker の立場からこれが批判されている。この章の結論として、宗教、科学、文化のいずれにおいても、一と多、個別と普遍の問題が鍵となり、環境思想においてもこの問題が十分解決に至っていないことが示される。

第II部ではあるべき環境思想についての本論文の立場が積極的に提示される。第5章では、英国で展開された美学の概念をもとに、人間の自然への感受性の変化や多様性をとおした環境思想の可能性が検討される。検討される美学的観念は、18世紀の Edmund Burke によって対比された(狭義の)美(beauty)と崇高(sublime)、それに William Gilpin によって両者の中間に見出されたピクチャレスク(picturesque)の三つである。本論文によれば、これらの差異は人間の自然への感受性における、空間および時間のスケールや、人間の自然への関与の大小によって形成されるものである。本論文は、これらの観念のいずれが正当とするのではなく、状況によって使い分けられる性格のものとする。また、環境思想の歴史のなかでしばしば争われてきた preservation と conservation の対立もこのような美学観念の枠組みのなかで理解されるとし、後者の日本での議論として「里山」の保護の視点を、ピクチャレスクに近いものとして理解している。この章の最後では、19世紀の社会主義者、John Ruskin の思想が取り上げられ、美的・文化的価値の立場からの経済学批判の可能性を示唆している。

第6章では、これまで論じられてきた環境思想の政策的インプリケーションが主題とされる。これは五つの論点に整理され、空間や資源の有限性、人間と自然の関係の内在/外在の両義性、自然観の可変性、短期的視野での人間中心主義的な自然への介入の問題性、自然を語るナラティブの重要性が説かれている。

結論となる第7章では、代表的な環境思想の意義が取り上げられ、人間と自然との相互的な関係構築の重要性が主張されている。

本論文でまず評価に値するのは、そのスケールの大きさである。本論文は、Leopold にはじまり、Callicott など現在につながる環境思想の批判的検討を主軸とし、倫理学、科学史、社会思想史、美学等の広い領域を横断的に対象としつつ、今日考えられる広義の環境思想の見取り図を示すことができた。また宗教、科学、文化の各領域における環境思想との接点の検討を通して、環境思想の論点を普遍と差異、理性と感情といった一般的な広がりのある主題へと開いている。本論文は環境思想が広く論じられながらも実践的に行き詰っていると判断し、その突破口を倫理学でいう「義務論」型の当為よりもむしろ、人間諸個人の自然に関する美的感受性の変化に求め、美学の諸観念に内在してそれを追求したことは独創性のある問題提起として評価に値する。

つぎに評価に値するのは本論文の実践的性格である。本論文は、過去や現在の環境思想を比較検討するに止まらず、政策へのインプリケーションを含む実践的提言によって締め括られている。ここには佐藤氏がこれまで環境省などで数多くの実務的なキャリアを有し、また本学グローバル共生プログラム博士課程に在籍中も、学業と並行して多くの実践的プロジェクトの企画立案、実施に参加してきたことの成果が表れている。本論文はグローバル共生プログラム学問理念に沿うものであり、そのひとつの成果の結晶と見ることができる。

もっとも本論文にもいくつかの欠点や不十分な点が見出されることも事実である。本論文の主要な理論枠組みはアメリカの環境思想や 18-19 世紀の英国の美学にもとづくものであり、それに対して非西欧世界の環境思想への貢献については、いくつかの言及があるものの十分なものではない。また美学的側面に特色がある反面、社会科学的視点からの環境倫理へのアプローチが薄いことも否定できない。

人間と自然の関わりについて提示された四つのモデル(第 3-5 章)は、従来の環境中心主義か人間中心主義かという二者択一に対して他の可能性を示した点では独自の意義があるが、異なる性格のものが同一のモデルに重ねられる恐れがあるなど、なお洗練の余地を残している。また第 5 章の美学を扱う部分で、美の感受性を功利で説明するさいの功利概念の曖昧さを問題にする指摘もあった。

しかし以上のような不十分な点は、本論文の価値を損なうものではない。よって本審査委員会は、本論文を博士(グローバル研究)の学位請求論文として合格と認める。